

大動脈解離に対する Inoue stent graft を用いたステントグラフト内挿術の臨床成績

京都大学医学部附属病院 循環器内科¹、・心臓血管外科²

PTMC研究所³、・兵庫県立尼崎病院⁴

東谷 暢也¹、田崎 淳一¹、当麻 正直⁴、丸井 晃²、坂田 隆造²

木村 剛¹、井上 寛治³

【背景】

真性大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術は安定した成績が報告されているが、大動脈解離に対するステントグラフトの適応は未だに得られていない。

当院では Inoue stent graft (ISG) を用いて大動脈解離に対してもステントグラフト内挿術を施行している。これは瘤の性状や径に合わせて graft の radial force を調節することにより血管壁が脆弱化している解離症例に対する内挿を可能としている。当院における胸部大動脈解離に対しての ISG 内挿術の臨床成績を報告する。

【方法】

2003 年より当院にて施行された胸部大動脈解離に対するステントグラフト内挿術 36 例を胸部の非解離大動脈瘤に対して施行したステントグラフト内挿術 100 例と比較する。

【結果】

瘤関連死や endoleak を評価項目とした臨床的成功は真性瘤に対する ISG 内挿術の成績と比較して遜色なく良好であった。

【結論】

大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術が普及した背景には安定した成績に加えて、低侵襲であることや対象患者に手術困難症例が多いことがあげられ、それは大動脈解離でも同様である。また、解離では病変長が長く、繰り返しの治療が必要になることが多いため、低侵襲なステントグラフト内挿術が望ましい。今回、ISG を用いた大動脈解離に対するステントグラフト内挿術の安定した成績を確認でき、今後の大動脈解離に対する有用な治療方法であることが示された。